惣作（そうさく）・鐘場（かねば）遺跡

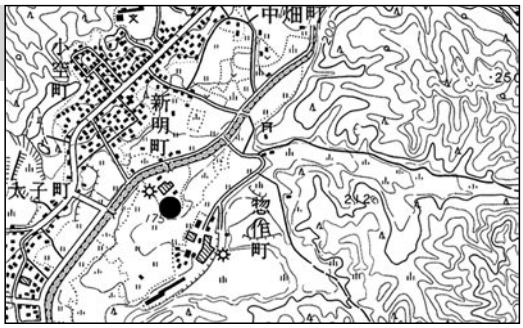
所　在　地　瀬戸市惣作町、鐘場町地内町
（北緯35度13分4秒 東経137度7分42秒）

調査理由　国道248号線建設

調査期間　平成16年４月～10月

調査面積　10,200㎡

担　当　者　酒井俊彦・鵜飼雅弘・樋上　昇・武部真木・川添和暁



調査地点（1/2.5万「猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設のため愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成12年度より実施している。平成12年度は遺跡範囲の南部、平成13～15年度は南部および北部と一部中央部の調査を行った。先年度までの延べ調査面積は13調査区20,575㎡である。これまでの調査によって旧石器時代末から近世までの遺構・遺物が検出されている。今年度は遺跡北部に１調査区、中央部に４調査区と北部に１調査区を設定して調査を実施した。今回が本センターの行う最終調査となる。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は瀬戸市東部の惣作町・鐘場町に所在し、矢田川支流である赤津川の左岸の標高170m前後の２段よりなる洪積河岸段丘上に立地する。周囲は山地および丘陵地帯であり、盆地の中央に展開する。遺跡は赤津川と門前川を西限及び南限とし、北側と東側は山地に接する。惣作川を挟んで地形的に南北２つに別れる。周辺には南側に太子縄文遺跡、太子遺跡、北東部の山地部に大目神社古墳、巡間Ｅ窯跡、瓶子窯跡、凧山Ｃ窯跡、凧山窯跡、凧山屋敷遺跡、凧山Ａ窯跡、赤津川上流に長谷口遺跡、八王子遺跡など旧石器時代から縄文時代が主体となる遺跡と中世以降の古窯跡が分布する。

調査の概要　調査区として、遺跡北部にＡ区1,850㎡、中央部にＢ～Ｅ区計7,750㎡、南部にＦ区600㎡を設定した。

０４Ａ区　南北に長い段丘の上位面と一部下位面に位置する。東側は惣作川の河谷に面し、西側と南側は下位段丘面である。隣接する部分の調査は平成13・14年度に行っている。調査区全体に近年の耕作による削平が著しい。主な遺構としては、弥生時代後期、古墳時代、奈良時代の竪穴住居を多数検出したが、遺構の遺存状況は悪く、遺物も全体として少量である。

弥生時代については、02Ｂ区で銅鐸型土製品を出土したSB01の残りの部分を検出した。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては11棟の竪穴住居を確認した。調査区南端部のSD01からは02Ｂ区と同じく古墳時代前期の遺物が比較的まとまって検出された。その他、調査区全体からは部分的なものと痕跡的なものを含め、約100棟の竪穴住居を検出した。古墳時代～奈良時代の時期に属すると考えられるが、全体として遺存状況が悪く、詳細は明らかにできない。

04B・C・D・E区　赤津川と門前川の間の南西から北東方向の段丘上に位置する。Ｅ区の南東部は門前川の河谷にかかる。Ｃ区の南東部とＢ区の大部分は低位段丘面にあたり、調査範囲の中央部は上位段丘面に相当する。調査区の北東端は惣作川の河谷に面する。南西に隣接する部分は平成12～15年度の調査が行われている。また、04Ｄ区の北西側は瀬戸市埋蔵文化財センターの調査が行われている。

この調査区で検出された主な遺構・遺物としては、古墳時代、中世および戦国時代と近世の時期のものがある。古墳時代の遺構としては前期の竪穴住居が２棟（SB07・08）、同後期が６棟（SB01～06）検出された。SB07・08はいずれも北東側に竈が検出され、土師器甕などが比較的まとまって出土している。SB01～03は隣接する平成15年度の03Ｂ区で同

時期の竪穴住居が展開し、その住居群の一部である。6世紀代の時期と考えられる。SB04～06は軸を同一方向にとる。遺存状況は悪く、出土遺物がわずかなため詳細は不明であるが、6～7世紀の時期に属す。04Ｂ区東半部分の下位段丘面において、基盤層の最上層の黒色土中でこの時期の土器が少量検出されている。中世以降、この面は水田であることが確認されている。溝、畦畔などは検出されず、花粉分析ではプラントオパールなどの結果は出ていないが、古墳時代にも生産域となっていた可能性がある。

中世の遺構としては、掘立柱建物の柱穴と考えられる土坑多数および、竪穴状遺構１基（SX01）が検出された。戦国時代以後の遺構に切られ、混在するために詳細は明らかにしえないが、03Ｂ区にかけて集落が存在したと考えられる。また、Ｂ区からＣ区南東部にかけての低位段丘面に水田耕作にともなうと考えられる溝が展開する。段丘面は惣作川から門前川に向かってわずかに傾斜し、溝は傾斜の方向に沿う形で最大４条が平行して検出された。埋土は黄白色粗粒砂を基本とし、流水の痕跡が認められる。少量の山茶椀が出土した。同層位で近世以降の水田耕作土がのるため、この時期の畦畔などの遺構は検出されなかった。その他、Ｅ区の門前川の河谷では基盤面に近い層序から、谷に沿う方向に杭列が検出された。河谷埋土から13～14世紀の包含層が検出され、山茶椀、古瀬戸施釉陶器、少量の木製品などが比較的まとまって出土した。

戦国時代の遺構は、Ｂ区からＤ区にかけて多数の掘立柱建物の柱穴および土坑、井戸４基（SE01～04）、溝などが検出された。土坑はＣ区南西半に密集して検出され、この部分を中心に南西側と北東から東側を大溝群が走り、集落域を形成する。集落域は北東から南西方向に走る溝群によって中央部が区切られている。大溝は検出面において、最大幅約８m同深さ1.5mを測る。南西側溝群は南東方向にむかって門前川の河谷に達している。北西側は瀬戸市埋蔵文化財センターの調査により北東方向に屈曲することが確認されている。北側の溝群は、東半はほぼ南北方向、西部は北西方向に角度を変える。新しい溝の掘り替えでは南東に屈曲して河谷に向かう方向をとる。これらは15世紀後半から16世紀前半の時期に属し、溝の切り合い関係から、最少３時期に細分される。調査区内では確認できないが、遺跡南西側で連結する可能性が高い。遺跡北西側では、一定の時期において連結することが考えられる。SB101は、比較的大形の掘立柱建物で、主軸を区画溝と同一方向をとる。SB102は大溝より新しい時期に属する。井戸は４基検出された。SE01・02は構造物が抜き取られているが、曲げ物を井戸側とする。SE03・04は桶組の井戸側で、SE04は方形井戸枠を有する大形のものである。

近世の遺構はＣ区東部で検出された。落ち込み状の遺構（SX02）から、17世紀代の瀬戸窯産施釉陶器、漆椀などの木製品が出土した。SE05、SE06はこの時期の石組み井戸である。

０４Ｆ区

上位段丘面に位置する。東側は門前川の河谷であり、急傾斜面となる。

古墳時代前期の土坑および中世以降の土坑、溝などが検出された。近年の耕作に伴う削平などによって遺構の遺存状況は悪く、遺構・遺物は少ない。少量の古墳時代土師器甕、山茶椀などが出土した。

ま　と　め

Ｂ～Ｅ区の位置する部分は、遺跡の所在する盆地の中央部分に相当し、段丘の最高所にあたる。中世から連続的に集落が展開してきたものと考えられ、今回の調査では戦国時代に大規模な溝に囲まれた集落が形成されたことが確認された。この集落は近世初期には縮小し、以後廃絶している。このことに関する伝承などは現在のところ確認できていない。今後、この時期の集落の推移について文献をふくめて検討していく必要がある。

（酒井俊彦）

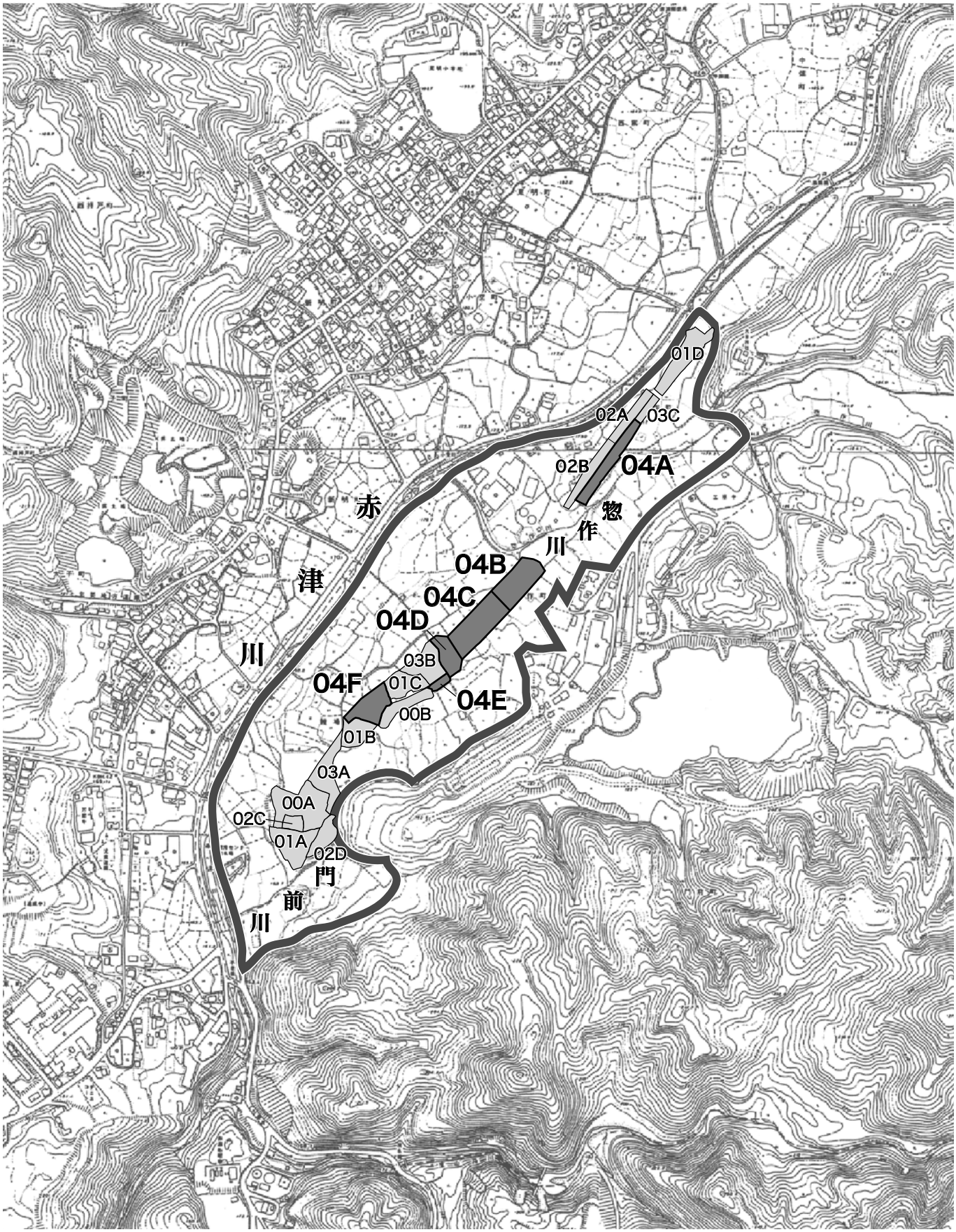


図１　調査区位置図（約1：7,000）

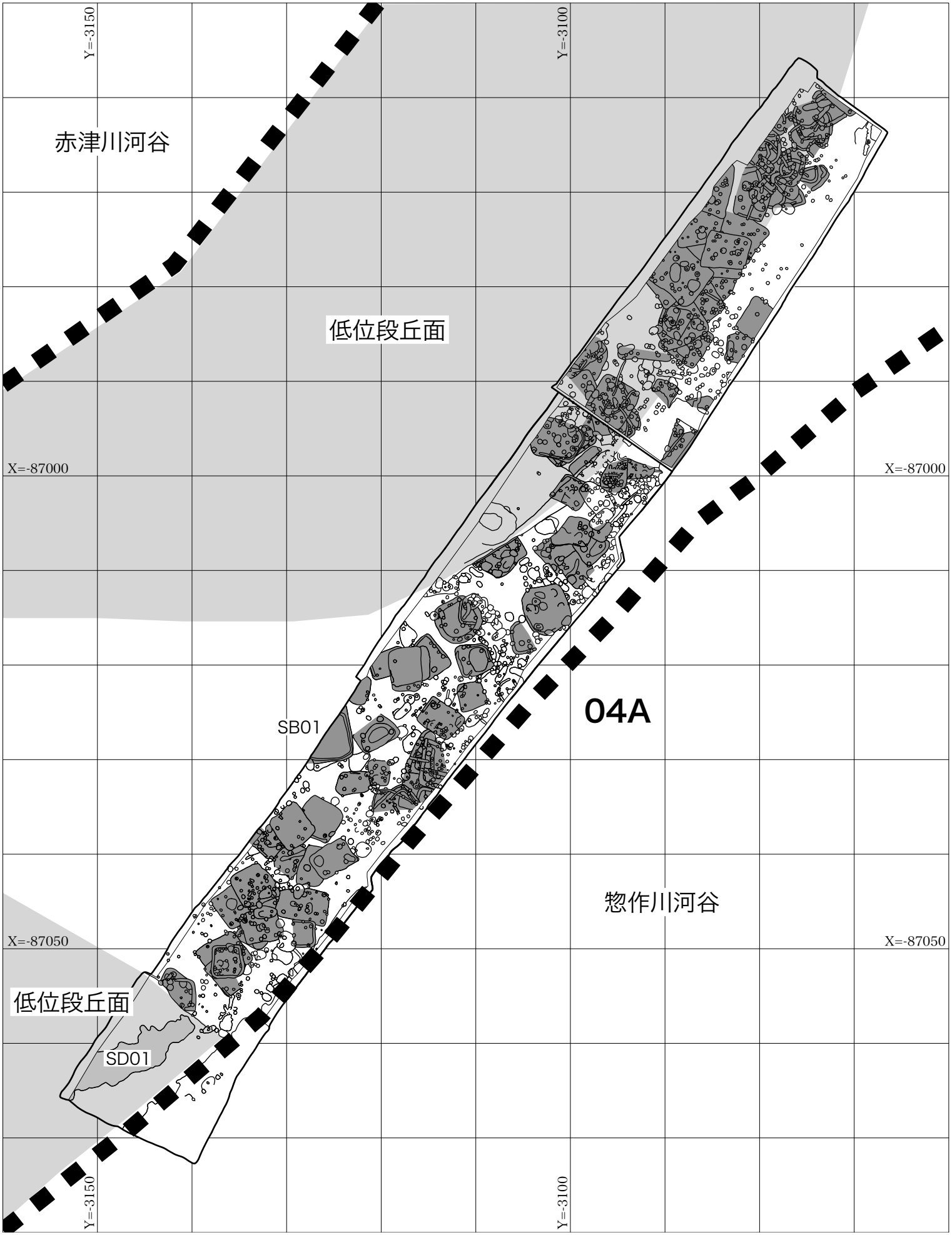
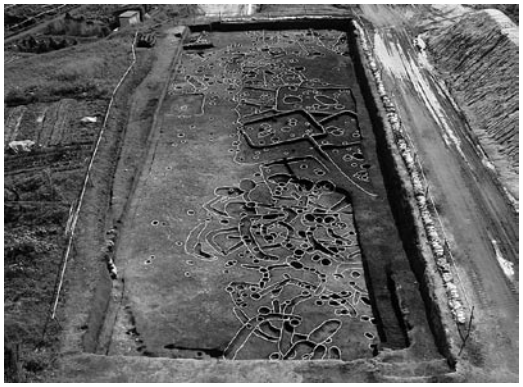
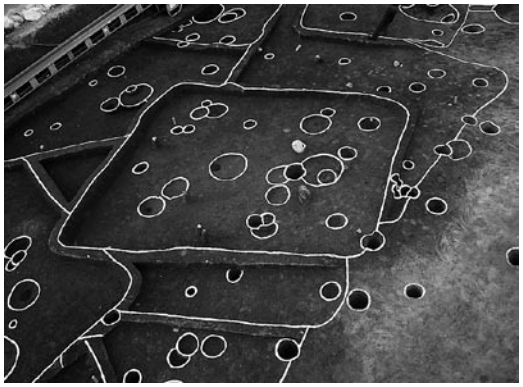


図２　Ａ区遺構全体図（1：500）



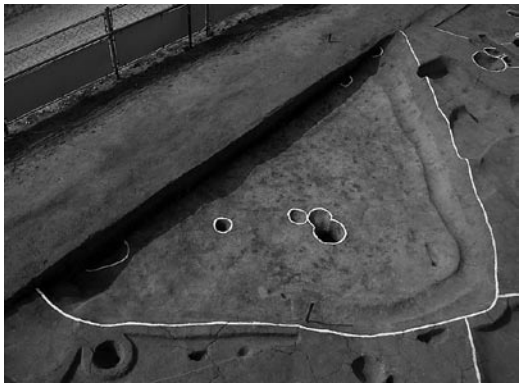
Aa区全景　北東より

Aa区竪穴住居

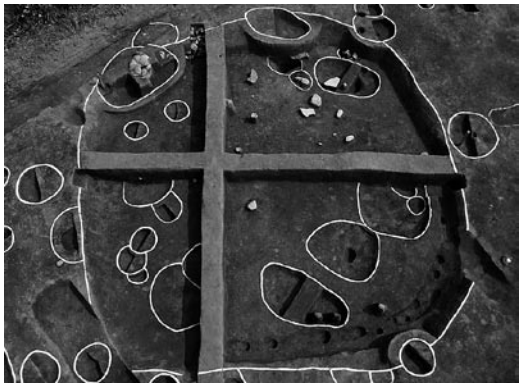


Aa区古墳時代竪穴住居

Ab区全景　北東より



Ab区弥生時代竪穴住居



Ab区古墳時代竪穴住居

古墳時代遺物出土状況

SD01　北東より

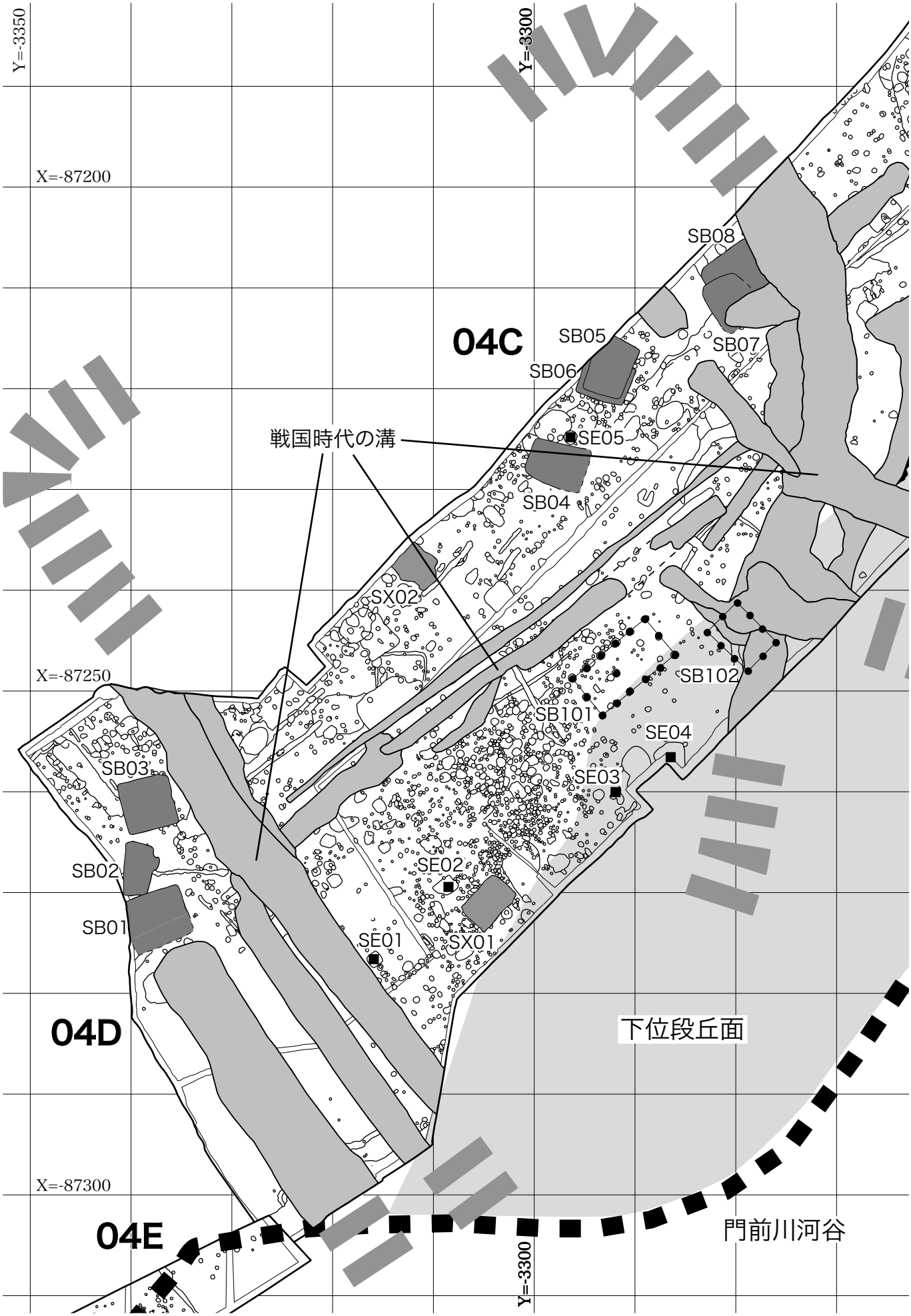


図３　Ｃ・Ｄ区遺構全体図（1：500）

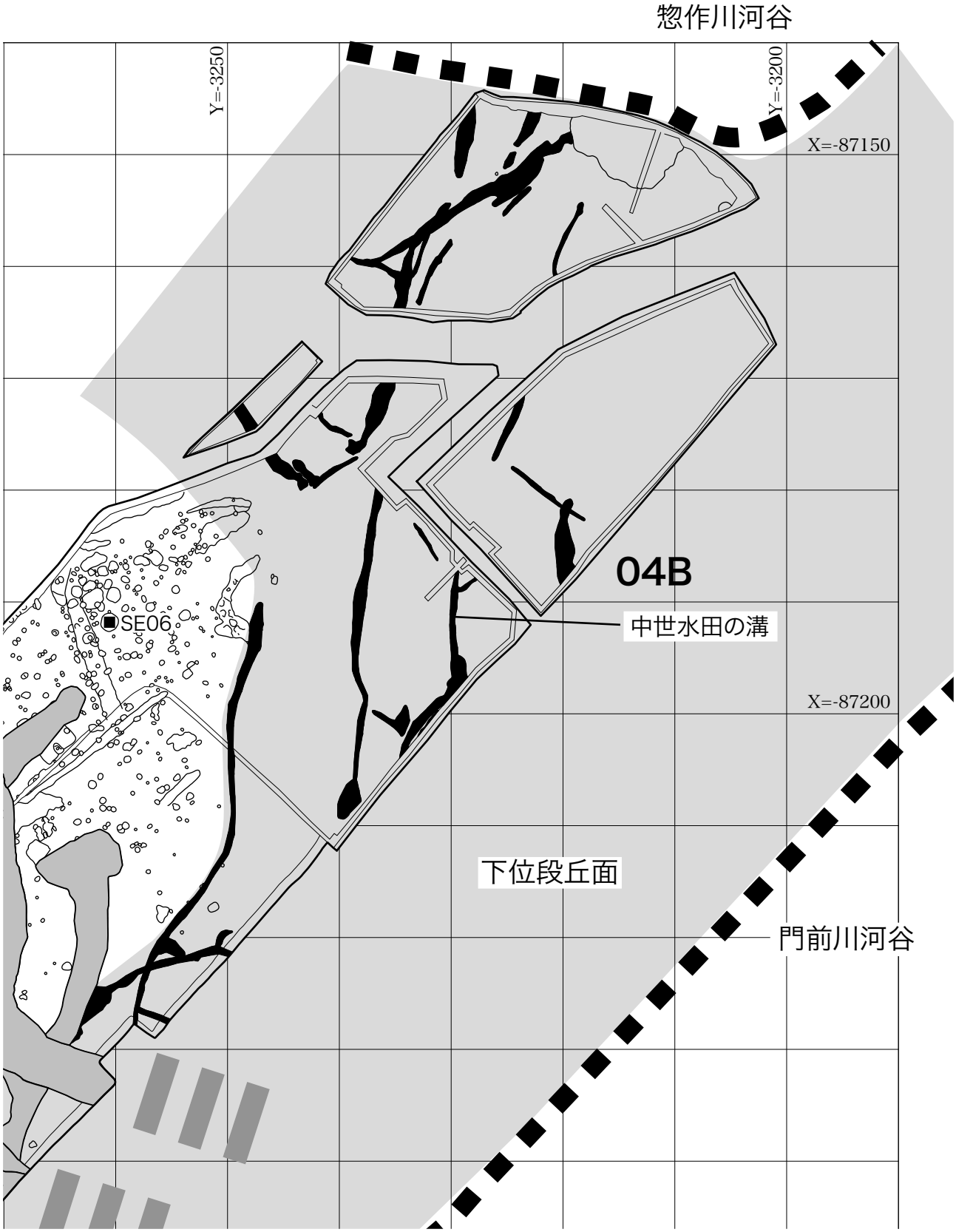


図４　Ｂ区遺構全体図（1：500）

Ｂ区全景　南西より

Ｂ区溝群　南より

Ｂ区溝完掘状況

Ca区全景　北東より

Ca区大溝群　北より

SB101　北東より

SE04　北東より

Cb区全景　南東より

Cb区大溝　南東より

Cb区竪穴住居群　南東より

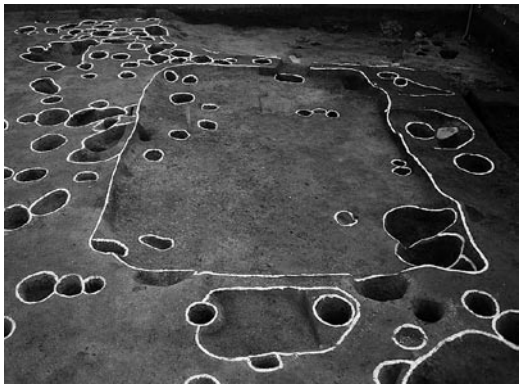
SX02　南西より

Db区全景　南東より

Db区大溝群　北西より

Db区古墳時代竪穴住居群　北西より

SE01遺物出土状況　南東より



SX01　南西より

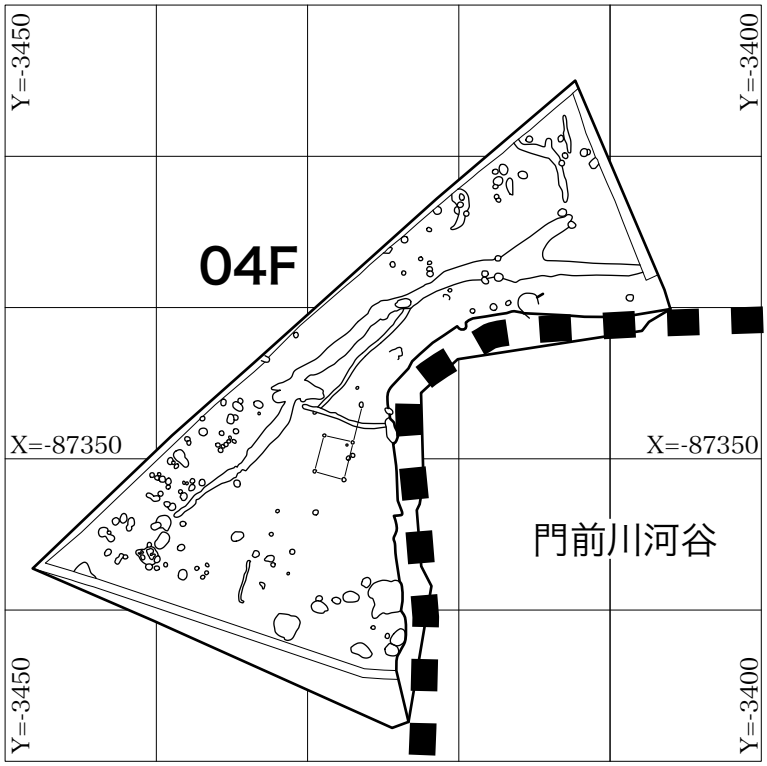


図５　Ｆ区遺構全体図（1：500）

Ｅ区全景　北東より

Ｅ区杭列　北西より

Ｅ区中世遺物出土状況

Ｆ区全景　南西より